

4 具体策

下水道マップが完成

巨大な建設費。事業実施は未定

町では、下水道整備構想エリアマップ(下水道マップ)を昭和六十二年度・六十三年度の二か年事業で作成しました。将来、町が公共下水道事業を実施する際の指針となるものです。

下水の処理には、各家からの下水を一つの処理場に集め処理する集合処理と、各家で下水を処理する戸別処理の二つがあります。家屋が密集していれば下水を運ぶ管渠が短くて済み、集合処理が経済的・効率的となります。しかし、家屋が分散していると管渠が長くなって設置費用がかかり、個別処理をした方が安上がりとなります。

このように、地域によって下水道整備のための条件はさまざまです。そのため事業を効率的

に進めるためには、どのような地区設定をし、管渠の接続をどのようにしたらよいかといった町全体の計画が必要です。

そこで、まず住宅の集まった集落を、下水道整備区域の候補として設定します。次に、おのおの区域が、集合処理が経済的か個別処理が経済的か、また

候補区域間にどのように管渠を接続したら効率的かを検討しました。

五つの案を出し、それぞれについて、管渠工事費・処理場建設費・三十年間の維持管理費の費用算定をしてみました。そのうち最も経済的・効率的な管渠の接続のしかたを考えました。

試算では百億円以上二十数年が必要

この案で費用を算定しますと町全体の管渠工事費に四九億二五〇〇万円、処理場・ポンプ場の建設費が三億四一〇〇万円、処理場・ポンプ場の維持管理費(三十年)が三五億一七〇〇万円、計一五億八三〇〇万円になります。また期間は着手して一部地域が使用できるまでに七年ほど、す



集落や団地などを基に15の下水道整備区域を設定し、近接する区域を組み合わせる効率的な事業にする。この案では①大野、山田、立仏、寺地、金巻などの黒崎処理区②小平方を含む木場処理区③黒鳥、北場、緒立を黒崎西部処理区④木場川前を含む板井処理区⑤の4処理区としている。

家庭でできる排水対策

五ページの下水道アンケートへの回答で、生活雑排水の排出先に問題があると回答者のほぼ半数近くが答えています。

公共下水道の整備が根本的な解決策といえますが、今すぐ整備に着手しなくても実際に使用できる生活雑排水の排出先が悪臭を放っていたり、美観をそこねていたりするのは、その地域で処理できるものは地域で処理することが、環境美化のためには必要でしょう。日常生活の中で気をつけていくべきこともあります。家庭で食べ物のかすや油脂類をそのまま流さないことや、浄化槽の管理をしっかりすることなどです。

次のようなことに気をつけましょう

- ◎台所で
 - 流し台には細かい目の網などを備え、調理くずや食べ残しを流さない。
 - 米のとぎ汁は排水しないで、庭の植木などに。
 - 使い古しの食用油は流さず、ボロ布や新聞紙などにしみこませて、ゴミとして出す。
 - 食器の油污などは、ボロきれや新聞紙でふいてから洗う。
- ◎洗濯や入浴時には石けんやリンを含まない洗剤を使う。
- 洗剤は正しく量って使う。目分量は使いすぎのものです。
- 風呂の残り湯を洗濯に。排水の量を減らせるし、温度が高いので洗浄力が増す。
- ◎浄化槽の維持管理
 - 定期的に点検を(汚泥がたまってくると、処理が不十分となり水質汚濁の原因となります)
 - 水はきちんと流す。
 - 便器の掃除はぬるま湯で行い、塩酸等の劇薬・洗剤・洗剤は使わない(浄化槽中の水をきれいにする微生物が死んでしまいます)
 - 専用のトイレトーパーを使う。タバコの吸殻、紙おむつなどは絶対に流し込まない。
 - 故障や異常が発生したら、直ちに専門業者に連絡を。
- ◎地域で
 - ゴミや空き缶を川に捨てない。
 - 地域ぐるみで側溝の一斉清掃を

黒埼町の今昔

町史編纂委員会

大野小唄の今昔(一)

昭和九年、「大野小唄」の歌詞が募集され、小柳広蔵さんの作品が特選に選ばれた。

大正末期から昭和初期のころにかけて日本は全国的な不況下にあった。

そのころ大野の料理業組合は、上は諏訪町の岩野屋・徳永屋から下は新田町の朝日屋まで二十一家を数え、芸妓の数も三十人を越え、他業種の不況をよそにかなりの繁盛ぶりであった。

灯ともりころになると、髪を初々しく日本髪に結って座敷に着飾った芸妓や若い半



「大野小唄」にもよくとり入れられた鷺の木の花(昭和初期の絵ハガキ・佐藤功氏提供)

さっそく村と料理業組合は歌詞を広く一般から募集した。多くの応募者の中から特選として選ばれたのが、八区の小柳広蔵さん(現

鷺ノ木公園の信濃川側がチユリッ浦畑になっていた

この特選歌以外にも何点かの入選作品があった。今まで埋もれてきたそれらの作品の中に、実に当時の時代背景や町の人々の暮らしを如実に物語るものが多い。そこで、そのうちの何編かを紹介する。

レコード廻れば酒もまわる
何が燃ゆるか灯が赤い
(注)小沼：大野諏訪神社の裏あたりをこう呼んだ。

大野繁昌の咲き誇る
諏訪の湖畔に白蓮咲けば
大野甚句の若衆の相撲に
丸く踊って角力で明けて
明けりゃ自慢の稼ぎ出し

執筆・宮田栄門

玉(芸妓の見習い)たちが連れ立って座敷へ急ぐ姿は、実になまめかしく今ではとても想像できない風情があった。

そんな時代の昭和八年、電車が開通すると、町の景気に好転のきざしが見え初めてきた。そこで、昭和九年に村役場書記(今の課長にあたる)の宗村卯一氏が中心となつて「電車と花見(鷺ノ木)を

目玉に宣伝して客を呼び込み、観光によって沈滞してきた町の景気の活性化を図ろうと計画がなされた。その第一段階として「大野」を売り込む唄を作ることにした。

三筋の糸：三味線のこと

入選「大野小唄」
作詞・阿部昌平(緒立)
一春は鷺ノ木あいの川堤
桜まねくか人の
花か美人か胡蝶の舞を
写す川面ボート行く
二夏は小沼のあの夕涼み
単衣湯上りあだ姿
遠い町の灯籠のあかり
恋をそるか虫もとぶ
三秋は諏訪様の宮祭り
派手着きかざる町娘
若衆相撲へは手に汗にぎる
袂にぎるに紅葉散る
四冬は下町あのカフェーあたり
むとむすような部屋の中

入選「大野小唄」
作詞・古川利喜一
一苦労しとげて末をえとげた
中ノ口川、信濃の川よ
積もる逢う瀬はあの岐面に
恋のかけはし大野
二風だ日和だ佐渡山かすむ
小唄まじりに碇をとけば
腕はたしかよ川風そだち
じゃり船船頭衆は今出船

入選「大野小唄」
作詞・無名芸妓
一阿賀と信濃の合うたる仲で
広く生まれた大野町
向う堤の桜の花は

大野繁昌の咲き誇る
諏訪の湖畔に白蓮咲けば
大野甚句の若衆の相撲に
丸く踊って角力で明けて
明けりゃ自慢の稼ぎ出し

執筆・宮田栄門